

疋田啓佑著 『呻吟語』

柴田, 篤
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/18053>

出版情報：中国哲学論集．4，pp.70-76，1978-10-01．九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：



正田啓佑著『呻吟語』

柴田篤

天保四年、大塩平八郎が時の大儒佐藤一斎に宛てた書簡によれば、彼が永年にわたる思想的混迷を打破して、陽明学に接近するに至る、決定的転機をもたらししたのは、明末の一士人呂坤（一五三六—一六一八）の著した「呻吟語」という書物であった。

本書は、この「呻吟語」の中から、約十分の一を抄出して書き下し、原文に返り点を施して、訳注を加えた本文篇と、冒頭の解説篇とから成っている。著者は本書上梓に相い前後して、「呂坤の伝記と『呻吟語』(上)(中)(下)」（『都城工業高等専門学校研究報告』第十・十二号、昭和五一—五三年）という論文を発表している。（以下「論文」と略す。）この三篇の論文の構成は次の通りである。一、呂坤の伝記 二・三、「呻吟語」その成立と諸本について 四、「呻吟語」の諸本の異同について 五、呂坤についての従来の研究 六、「呻吟語」の思想 七、結語と今後の問題。このうち一から五までは、本書の解説篇におおむね該当するが、紙幅の関係で「論文」の記述の方がより詳細である。また六の「呻吟語」の思想については、本書本文篇各段の解説に散見しているものを、全体的に整理し、新たに検討し直したものである。そこでこの書評では、以上の三篇の論文をも含めて、呂坤ならびに「呻吟語」に関する、著者の一連の研究を、総合的に見ていきたいと思う。

ところで、著者も「あとがき」で述べているように、「呻吟語」全体の書き下しと注釈を行ったものとしては、既に公田連太郎氏の『呻吟語』（昭和三十年、明德出版社刊）という大著がある。著者は、公田氏のこの研究を十分に踏まえた上で、更に「宋明学特有の思想的な方面にまだ余地が残されており、その点につき及ぶ限りの追究を意図し

た」(「あとがき」)と述べている。本書のねらいと特色は、実にこの点にあると考えられる。そこで筆者も、著者のこのねらいに即しながら、考察を進めていこうと思う。

まず解説篇の始めには、墓誌銘・呂新吾先生伝・明儒学案・明史列伝・去偽齋文集などを資料としながら、呂坤の略伝と著作がまとめられている。呂坤は三十六歳で進士に及第し、三十九歳の時より六十二歳で致任するまで、地方官および中央官僚として活躍する。万曆二十五年、国政について直言した上奏文を呈し、それを機に職を辞す。以後晩年の二十年間は、林居して講学・著述に専念する。

「呻吟語」は、呂坤が二十代後半からおよそ三十年間にわたって、折にふれて書き綴った文章を輯めたものである。十七篇に類別され、心性論・世界観・學問論から、社会・政治の諸問題に至るまで、幅広い内容を持つ。万曆二十一年(一五九三)の自序をもつこの書は、以後刪改や増補を行いながら版を重ね、清朝に入ってからもしばしば刊行され、多くの學者の間で尊重された。それらの諸本について、かつて公田連太郎氏は、「今はいづれも容易に得難いものとなった。惜しむべき事である」(『呻吟語』序説)と、閲読が困難であることを嘆かれた。が、著者はそれらの諸本について、能う限りの調査を行い、本書解説中「『呻吟語』の諸本について」(二二―二八頁)において、刊行の次第を整理し、列挙している。諸本がどのような系統で遂次刊行されていたかは、本書二九頁に図示され、

「論文」(中の図と併せてみる時、「呻吟語」の出版状況が一目瞭然となる。著者は、諸本それぞれの刊行状態を個別的に調べるだけでなく、それらが互いにどのような連関をもつか、その埋もれた足跡を掘り起こし、系統づけることによって、「呻吟語」という書物の数百年にわたる歴史を再現してみせたといえる。また諸本の内容の異同についても、精密な調査を行っている。(「論文」中)。本書では省略)以上のような「呻吟語」に関する書誌学的研究は、もとより始めての試みであり、このことは「呻吟語」の後世に与えた影響を見、かつこの書物の性格を考察するために、まことに貴重な材料を提供したものだといえる。各地に散在する諸本を丹念に調査し整理するという、煩瑣な作業をつみかさねられた著者の努力を待って、始めて可能なことであったと推察される。

次に、「呻吟語」を通して窺われる、呂坤その人の思想に対して、著者がどのような接近の仕方をしたかを見てい

きたい。

著者は解説篇において、呂坤および「呻吟語」に関する従来の研究を紹介している。それによれば、呂坤の思想的研究は、最近に至るまで余りなされておらず、ただ現代中国において、唯物史観による思想史の再検討によって、呂坤は一躍脚光をあび始めたのである。「明代中葉の進歩思想家、反道学の先駆者」（侯外廬『呂坤哲学選集』序・一九六一年）という評価がそれである。こういった一連の研究は、侯外廬主編『中国思想通史』第四卷下冊・第二十一章「王廷相、黄縉、呂坤の反動学思想」第三節「呂坤の元氣守、恒」の学説及びその進歩思想」（一九六〇年・北京人民出版社）に代表される。（以下「通史」と略す）著者は「論文」中「呂坤についての従来の研究」の中で、この「通史」の所論を詳細に説明している。（本書解説篇では要約）著者の立場を見る前に、まず「通史」の見解の要点を記しておく。

一、呂坤は道学（朱子学）の批判者である。

二、呂坤の哲学の核心は、唯物主義的世界観（氣一元論）である。

三、呂坤は認識論と人性論（心性論）の方面において限界性をもつ。

では、著者は呂坤思想をどうとらえようとしているか。「論文」(下で著者は、「呻吟語」の思想について、(一)思想上の系譜、(二)呻吟語の哲学思想上の特色、(三)唯物主義、の三節にわけて論説している。(一)では、「宋学の大成者朱子について、呂坤は相当に批判的である」が、「一方的に朱子を批判したわけではなく、「朱子についてもっと深い理解があったと考え」られる、と指摘する。また(二)では、呂坤の思想的特質として、中・敬・静・涵養の各項目を挙げ、「呻吟語」から該当する諸条を引用し、解説している。(三)においては、前記「通史」の主張をそのまま紹介している。そして、著者は結論として、呂坤思想に対する自らの視座について、「中華人民共和国成立後なされた研究が、唯物思想と伝統儒教思想批判の面へのみ重点を置いて再評価しているのに対し、当時の儒教や儒者を批判しつつも、それでも儒者であった、柔軟な、そして現実政治に生きた儒者の姿の、その思想として捉えようと試みた」、と述べている。

著者は、あくまでも呂坤を彼が生きた明代末期に引き戻して、その思想をとらえようとしている。隆慶から万暦年

間にかけて、内憂外患の時代に、実務官僚として活躍した呂坤が、「現実政治に密着し、応用のできる実学的な面を導」び、「実際の政治に役立つ、また目下早急にやらねばならない実践的なところ急務であると考えて」いたことに注目し、そこに彼の思想の特質をみようとしているのである。「呻吟語」がほぼ呂坤の官吏時代を通して書かれたものであること、彼のもう一つの代表的著作である「実政録」が、地方官に対して吏治の要諦を具体的に説いたものであること、などを併せて考える時、この指摘は、呂坤思想の性格に対する確な見方であるといえよう。その意味で著者は、反道学の面を殊さらに強調した「通史」の立場に全面的に倚りかかっているわけではない。が、「通史」の呂坤観のかなめといえる、「呂坤は氣一元論であり、朱子学で説く万物の本源としての道や理を否定した」（「通史」九四九頁参照）という主張については、これをそのまま踏襲しているように思われる。少なくともその見解に対して、殊さら異議を唱えたり、検討を加えたりすることは、控えているようである。この点に関して、少し考察を加えてみたいと思う。呂坤思想が唯物主義思想であるか否かは、一まず置くとして、ここでは呂坤の「氣一元論」と称せられるものが、どのような内容をもつものであり、また朱子学といかなる関係にあるか、ということを検討してみることにする。

そこで先ず所謂「氣一元」に論及した箇所を、本書からいくつか拾ってみよう。

①「氣は形の精華、形は氣の渣滓^{さし}なり。故に形の中に氣あり。氣なければすなはち形生ぜず。」（一〇四頁）
②「宇宙の内に、万物を主張する底は、ただこれ一塊の氣なり。氣はすなはちこれ理なり。理は氣の自然なるものなり。」（一一一頁）

③「天地万物はただこれ一氣の聚散にして、さらに別箇なし。形は氣の附きて以て凝結をなす所なり。氣は形の托して以て運動をなす所なり。氣なければすなはち形存せず、形なければすなはち氣住^{とど}まらず。」（一八二頁）

以上のように呂坤は、形は氣より生ずるものであり、万物は一氣の聚散によって成り立つ、と考える。その意味で、

「呂坤は万物の生成に対して氣一元論を説いた（一七八頁、傍点は筆者、以下同じ）、という著者の指摘は、一応妥当なものといえる。が、氣が万物を構成するというのは、そもそも中国では伝統的な生成に関する考え方ではなかったか。著者は、朱子の「理氣二元論」や陸象山の「理一元の立場」に対して「呂坤は氣一元の立場をとる」（一〇四頁）と、説いているが、万物の生成に関する呂坤の考え方は、はたして朱子學と異なるものであろうか。

言うまでもなく朱子は、万物の構成要素として、理と氣の二元を立てる。理は「物を生ずるの本」（根本）であり、氣は「物を生ずるの具」（素材）である。（朱子文集・卷五八・答黃道夫）そして、「理のない氣はなく、氣のない理もない」（氣だけでも、理だけでも存在しない。朱子語類・卷一・二丁）、と説かれるように、この理と氣は相即不離なるものではあるが、「若し本原を論ずれば、即ち理ありて然る後氣あり。……若し稟賦を論ずれば、則ち是の氣ありて而る後理隨いて以て具わる」（朱子文集・卷五九・答趙致道）とあるように、理は行動準則・存在原理としては、氣に対して優越性・優先性をもつが、万物を有形のものとして生成する素材であるという意味において、氣は理に先行するものといえる。だから朱子も、「物が生ずるのは、氣が聚まることによって、形ができるのだ」（朱子語類・卷一七・五丁）と言っているのである。このように見てくると、呂坤の氣一元論と称せられるものも、生成の局面において見るならば、朱子學と本質的に異なるものではないといえる。

では呂坤思想において、理の性格、および理と氣の關係はどのようなものであるか。彼は、「天を生じ地を生じ、人を生じ物を生ずるはみな氣なり。しかる所以のものは理なり」と、理と氣をそれぞれ定義した上で、理と氣を二つのものとして対立的に説いてはならない、と言っている。（本書一一七頁）呂坤思想を氣一元論と規定する「通史」は、この主張をとらえて、独立して万物を作る本源としての「道」や「理」を否定し、「道」や「理」は物質内部の「然る所以」「規律」にすぎないとする考えだと説く。（「通史」九四九頁）朱子學で説くように「物質を統御する」ものとしてではなく、「氣の固有する性質」として「理」をとらえている、と「通史」は説くのであるが、はたして呂坤は、万物の本源としての「道」や「理」の權威を否定ないしは輕視しているといえるであろうか。

呂坤は、大学の「格物」の功夫は、「身心意知家國天下の理」を「察識體驗」することだと説く。この理は、「先天純粹の理」であって、「陰陽五行の先に在り、陰陽五行の主と爲る」ものである。陰陽五行は氣質に屬し、善惡の

区別があるから、この気によって形成される万物にも善惡の区別が生じる。だから形成された事物において、「先天の性」は「善あり惡なき」ものであるが、「後天の性」は「善あり惡ある」ものとなる。（以上、去偽齋文集・卷四・答孫家宰立亭論格物、第二・三書）このように呂坤は、朱子学と同様、「義理の性」と「氣質の性」を明確に区別するが、それは、「善ならざるの理なく、みな善なるの気なし」（本書五一頁）という、理氣に対する認識によるものといえる。呂坤においても、惡の萌す原因は氣にあり、理は純粹至善なるものとされる。「然る所以」である理は、善の根柢、価値の根源として、氣に対する優越性・優先性をもつのである。そこに、朱子学における性善論の伝統を、明確にみることが出来る。以上のように、呂坤の理氣論・心性論を一体のものとして把握してこそ、「氣に動かざれば、事事好し」（呻吟語・卷一・存心）、「物欲は氣質より来る。只だ氣質を変化するのみ。更に甚の物欲をか説かば」（同・談通）という彼の主張をよりよく理解することが出来るのではないか。

このように見てくると、呂坤の理氣論は、理と氣の性格規定とその関係様式において、朱子学のそれと本質的に異なるものではないといえる。ただ、理氣心性といったさまざまな概念の規定に緻密な神経を注いだ朱子その人に比べるならば、確かに呂坤はやや嚴密さを欠いており、朱子学と異なる立場に立つかのような印象を与えるきらいがないわけではない。が、その思想構造を細かく検討していくならば、朱子学の理氣論から大きく逸脱したり、道や理の權威を否定する方向にあったとはいえないのである。むしろ呂坤は、「天下の事は皆実理の爲す所にして、末だ実理なくして事物ある者あらざるなり」（呻吟語・卷一・談道）と説くように、「実理」を尊重する立場にあったといえる。既に著者によっても指摘されているように、「現実政治に密着」した、「実践的な」学問を尊ぶ呂坤は、具体的個別的な事柄に即した形で道理を探究し、それを直ちに実践していくことを重んじた。それが理氣相即の強調となって表現されているのである。だからこそ、口先だけで実行が伴わなかったり、現実の具体的な事柄に適用しなかったりするような学問のあり方を批判するのである。（去偽齋文集・卷三・楊晋庵文集序）彼が時として、「宋儒」を、「道学」を批判するのは、現実界から遊離した形で道を説き、理を論ずることを拒否したからであって、道そのものの、理そのものを否定したわけではない。呂坤は無極・太極、理氣の同異、性命の精粗、性善の是否などについても、それらを問題にすることが、議論の爲の議論に流れてしまうことをおそれたのであって（本書九九頁参照）、「人の爲に

冤^{えん}を弁^{あきら}じ謗^{あきら}を白^{あきら}かにするは、これ第一の天理なり」（本書八一頁）というように、官吏としての日常性の中で、天理を体現していくことを第一目標としたのである。ある意味では呂坤は、事物に即した形で理を窮めていくことを主張する朱子学の、忠実なる実践者であつたとさえいえるのではなからうか。

清初の学者で、朱子学一尊を標榜する陸隴其は、「呻吟語」の内容で疑問とする点を列举して、「読呻吟語疑」（三魚堂文集・巻四）を著している。理気の分合について、「朱子の説、備われり」（同・巻一・理気論）とする陸隴其は、この中で呂坤の理気論を、朱子学のそれと殊さらに異なるものとしては扱っていない。彼は、「呻吟語」に序文を書いて、「その言は皆程朱と相い表裏す。まま出入する者あるも、亦た少なし」（同・巻八）と説いている。陸隴其の、この呂坤に対する評価は、それなりに当を得ているもののように思われる。

以上のように考えてくるならば、「呂坤は朱子の理気二元論に反対して気一元論を説き、道や理の権威を否定した」という呂坤思想の規定の仕方には、いささか無理があるといえるのではなからうか。少なくとも、「通史」で説くような、そういった見方から一旦自由になって、あらためて呂坤思想をとらえなおす必要があるのではないか。

この点の追求において、筆者は本書に対して、いささか不満がないわけではない。が、従来我が国においては、とかく処世訓・修養の書として重んじられる傾向にあった「呻吟語」を、明末の一士人呂坤の生の言葉として、宋明思想史の大きな流れの中でとらえようとした著者の姿勢は、高く評価されてよいと思う。部分訳ではあるが、「呻吟語」が始めて平易な口語で訳出されたことは、よろこばしいことである。

「中国古典新書」シリーズの一冊として著された本書は、解説面においても、訳注面においても、紙幅が限られており、その意味で最初から大きな制約をうけていたといえる。そういった条件の下で、思う所を満足に表現できなかったであろう著者の意中を、十分に汲み取り得なかったことを、窃かに懼れる次第である。

昭和五十二年四月 明德出版社刊

『中国古典新書』 二百四十二頁